

美しい日本、平和な社会、黄金のビルマ国籍者難民

(在日ビルマ国籍者難民のためのレフュジー・コンサーン・ワークショップ開会演説)

2007年6月24日 タンナンリヤンタン

本日、このワークショップにご参加くださったみなさまにご挨拶申し上げます。まず自己紹介をさせていただきます。わたしはタンナンリヤンタンと申します。ビルマ市民のチン民族であり、チン州のティム出身です。日本で2005年に条約難民として認定されました。

このワークショップで開会の演説をさせていただき、大変うれしく思っています。本日、このワークショップに出席いただいたさまざまな団体の指導者、代表、関係者、オブザーバーのみなさま、在日ビルマ国籍者難民のみなさまに、このワークショップの実現に関わったすべての人々の代表としてお礼申し上げます。難民支援協会の伴めぐみさんにもお礼申し上げます。この「在日ビルマ国籍者難民のためのレフュジー・コンサーン・ワークショップ」開催の経緯についてまずご説明申し上げます。

まず、お断りしたいのは、このワークショップが新たな政治団体の結成ではないということです。また、既存の政治団体が、その活動の一環として開催したものでもありません。

- ✓ ビルマ国籍者政治難民のそれぞれが経験している、難民に関する事柄や問題点に関して関心をもつ難民どうしが意見交換をし、問題解決への道筋をともに探る集いです。
- ✓ ビルマ・レフュジー・コンサーンの活動に関心をもつ団体やNGOより意見を頂き、支援体制作りのために協力し合えるよう難民との橋渡し役を務めます。
- ✓ ビルマ国籍者難民と弁護士グループ、NGOと間の交流を深め、難民問題をビルマと日本が協力して解決することを目指します。
- ✓ ビルマ・レフュジー・コンサーンの活動として、資料の収集、記録、報告の出版を行います。

現在、日本ではビルマ国籍者難民の代表として活動するビルマ国籍者、もしくは代表となる組織は存在しませんでした。在日ビルマ民主化活動を行う団体が、その団体の中に難民に関して支援を行うボランティアや担当者、委員会を設置することによって、問題を抱えた難民たちを効果的に支援することが可能なのではないかと思います。このワークショップが、日本政府や、UNHCR関係者が難民のコミュニティを実際に公式訪問して、問題解決のために働きかけてくれるように求める、ビルマ国籍者難民たちにとっての最初のステップになればと思っています。国境地帯と世界各国に暮らすビルマ国籍者難民たちと同じような、しっかりした支援体制が在日ビルマ国籍者難民に対して整備されるお手伝いができればと思っています。

難民、政治亡命者、難民認定者

入国管理局では「Refugee」という言葉が用いられ、ビルマ語ではこれを「ドウッカーテー」、日本語では「難民」といいます。日本語で難民と申しますが、この言葉から日本人はいろいろイメージするかと思います。わたしたちビルマ国籍者はこの言葉を「政治亡命者 (Asylum Seeker)」として解釈し、自らそう見なしています。このワークショップでは「政治亡命者」や「難民認定者 (Asylee)」とい

う言葉を使わずに、「Refugee、難民」という言葉に統一したいと考えています。

ビルマと難民問題

現在のビルマ連邦の地では、大昔よりそれぞれの民族が独立不羈に独自の領域で暮らしてきました。1885年にイギリスはビルマ王国を領有しましたが、少数民族の土地はすぐには奪うことはできず、徐々に植民地を拡大していったのでした。植民地支配からの脱却のためにすべての民族が協力し、ビルマ連邦建設に同意し、1948年1月4日にビルマ連邦の独立が達成されました。

独立後、少数民族に対する不平等、宗教と人権に関する問題が噴出し、1962年3月2日に軍が国権を奪うと、軍事独裁政権の支配のもと、全国民が人権と民主主義の権利を失いました。1988年に民主化運動が盛り上がり、軍事政権の弾圧と虐殺により圧殺され、現在に至るまで国民たちは軍事政権の軛のもとに苦しんでいます。

少数民族の権利や民主化のために長い間闘い続けてきた国民たちは、軍事政権の迫害ゆえに逃亡し、難民や政治亡命者として世界中に散らばってしまいました。

2007年4月20日は世界難民の日です。UNHCRの2006年の報告によれば、世界には自分の故国から逃げた難民が4千万人いるとのこと。2006年にUNHCRが行った3百万人の再定住者のうち、ビルマ国籍者はたったの6千人です。UNHCRの公表した4千万人の難民のうち、どれだけのビルマ出身の難民がいるかは明らかではありません。

タイ・ビルマ・ボーダー・コンソーシアム(TBBC)関係者の話によれば、9つのビルマ難民キャンプに15万人の難民が暮らしています。このキャンプで20年以上も辛酸をなめつつ住み続けている人もいます。タイ・ビルマ国境のみならず、インド、バングラデシュ、中国国境、マレーシア、アジアの国々、世界各国にはビルマ国籍者難民が広がっています。国境の難民の数は、2006年初頭には23万人だったのが67万人に増加しているのが明らかになりました。世界中のビルマ難民の数は200万人と見積もられています。難民問題は悪化の一途を辿っているのです。

ビルマ難民問題の解決に際し、ビルマの政治的状況がもっとも重要な要素となります。ビルマ連邦に暮らす国民の40%が、非ビルマ民族(いわゆる少数民族)です。ビルマの国土の57%が少数民族居住地域です。

国家の中枢を握っているのはビルマ民族の軍事政権ですが、民主化運動を行うビルマ民族活動家たちは、民主化と連邦制、少数民族の状況を理解し、支援してくれています。

しかし、地理的には少数民族居住地域は隣国との国境に位置することが多く、ビルマ中央部に比べると、軍事政権の迫害、抑圧を一層ひどく受けています。それゆえ、難民の数の点では、少数民族のほうが多いという状況になっています。

さまざまな民族が混在しているので、難民キャンプや難民問題に取り組む際には非常な細心が必要です。難民に関わる団体は、地理的要素、民族的要素までも考慮に入れて支援を行う必要があります。中東やアフリカ、インドシナ地域の難民に関する経験を一層幅広く研究する必要があります。難民の支援者は、難民に関する法律、規則、手法、方法論に関して知識を深めなくてはなりません。なぜなら、難民問題には教育問題、健康問題、再定住問題、生活向上に関する問題、社会的な問題などのさまざまな問題が含まれるからであり、支援の際にはこれらの問題について把握しておく必要があります。

日本とビルマ国籍者難民

日本とビルマは歴史的に深い関係があります。アウンサン将軍と30人の志士たちがビルマ独立のための軍事訓練を秘かに受けたのは、当時の日本の領土内でのことでした。

国民的指導者であるアウンサンスーチーさん率いる国民民主連盟が「2度目の独立」を掲げて闘っているこの時期に、民主化と人権のために闘っているビルマ国籍者難民と難民申請者を日本が受け入れ、強制送還の対象としないのは、高く評価できることです。

ビルマ政治問題を国連安保理の議題に取り上げるよう日本が賛成を表明したのも、有り難いことだと思っています。日本では世界でもっとも発展した国の中のひとつであり、多くの外国人がさまざまな理由、さまざまな経緯によって入国しているのも確かです。日本にいるビルマ国籍者は、合法的就労者、非合法就労者、難民（政治亡命者）に分類することができます。

日本は難民認定制度を開始した1982年より2005年までの間に、90人の難民を認定しました。2006年には申請者が増え944人となり、うち16人が難民として認定されました。不認定とされた259人が異議申し立てを行い、そのうち14人が認定されました。現在、日本にはビルマ国籍者の難民が1000人以上います。法務省の報告によれば、ビルマ国籍者の難民申請者は2002年に38人だったのが、2006年には626人に増加しました。かつて、日本には5万人ものビルマ国籍者がいたと聞いていますが、現在は2万人ほどと推定されています。ビルマ国籍者の数は半減したにもかかわらず、難民申請者の数が増加しているのは、ビルマの政治状況がますます悪くなっていることが理由であると考えることができ、日本政府にはビルマ国籍難民に関する支援により真剣に取り組んでいただきたいとお願い申し上げる次第です。

ビルマ政治問題はアジアの安定を脅かしています。ビルマの政治的態度に、アセアンの国々は困惑と失望を隠せません。軍事政権は、アウンサンスーチーさん、ウ・ティンウー、ウ・ウィンティン、ウ・クントウンウーらを含む政治囚1300名の釈放を拒んでいるばかりでなく、国民的和解に向けた政治的対話を無視しており、国内状況は日に日に悪化しています。

日本での難民申請数は日々増加しています。同時に申請者たちが直面する問題もますます多くなってきています。難民問題は1年や2年で解決するものではありません。時間が経つにつれ、健康問題、社会的問題、教育問題、生活問題、子どもの問題、老後の問題、葬儀の問題などがつぎつぎと複合的な形で現れることでしょう。

難民申請者たちは、収容されたときに別の問題にも直面します。健康を害したり、精神障害になったり、重みに耐えかねて自殺をしたり、金銭的問題を抱えたりなどの問題がつぎつぎに生じています。難民たちが犯罪と関わりがないということは、まさしくビルマ国籍者難民が政治的難民であることを意味します。ビルマ政治問題とビルマ難民問題に対し、日本政府とNGOがさらに協力して取り組んでいただけるよう、お願い申し上げます。

「美しい日本、平和な社会、黄金のビルマ国籍者難民」

在日ビルマ国籍者は、自分たちが暮らす日本社会と日本人の性格をもっと理解する必要があります。ビルマの国のこと、自分たちの生活のことを日本社会がもっと良く理解するように努力すべきです。

日本人は昔から1つの民族として1つの国に暮らし、海に隔てられた島国であり、隣国と国

境を接しているわけではありません。その社会は外国人を簡単に受け入れたり、住むことを許すようなものではないということを肝に銘じておく必要があります。

ですから、外国人を受け入れること、難民を受け入れることは日本社会の一部にとっては今なお困難な問題なのです。それゆえ、難民と外国人が人権の観点から受け入れられるよう、政府関係者、NGOは精一杯取り組んでいます、それでも思うようにいかないということを、わたしたちは理解する必要があります。

ビルマは多くの民族、文化、言語が混在する社会です。地続きの隣国との交流も長きにわたります。したがって、ビルマ国籍者難民のコミュニティが日本社会に加わったときに、コミュニケーションがうまくいくように、双方の懸絶を埋めてくれるNGOとビルマ社会運動グループの間には、友好と分け隔てのなさ、信頼関係と協力関係が存在することが重要になります。

今日、世界の生活水準は上昇し、1つの世界的村社会（グローバル・ビレッジ・ソサイエティ）として諸民族を隔てる境界はなくなり、民族、宗教、肌の色に基づく差別なく、自由に交流することができます。それゆえ、この社会全体においては人権の観点から宗教や民族の分け隔てなく共存することが重要です。自分たちが暮らす日本社会の中で、自分の置かれた状況をよく理解してもらい、日本人とともに仲良く暮らせるようわたしたちは努力しなくてはなりません。日本社会をなす人々があなたのことを理解してくれたなら、今度はあなたの民族や国の政治状況を分かってくれるようになってくれるでしょう。そうすれば日本社会は、NGOと政府がビルマに関して関心を持ち、共感し、応援するように、わたしたちの味方となって勇気をもって働きかけてくれることでしょう。

2003年にインドで起きた出来事についてお話しさせてください。ビルマ国籍者難民とビルマ政治活動家たちをミゾ州政府は受け入れ、十分な支援を行ってきました。NGOや個人、宗教関係者、宗教団体もできる限りの支援を続けました。ミゾ州の社会全体が難民たちを家に招き入れて、助けてくれたのです。しかし、あるビルマ国籍者の起こした犯罪により、社会はビルマ国籍者をいっせいに拒絶するに至りました。ビルマ国籍者たちの中には良い人もいればそうでない人もいますが、ミゾ州社会は一緒くたにして追い出したのです。個人的な関係すらも壊れ、宗教団体も固く門を閉ざしました。ミゾの右翼少年たちは、外国人を保護しようとする人々を、民族と国家に対する裏切り者として糾弾したため、穏やかだった社会は激しく動揺し、憂慮すべき事態が生じました。

この出来事の原因が、ある人間による犯罪だったのか、それともビルマ軍事政権の策略だったのか、今日に至るまで真相は不明のままです。

ビルマ国籍者難民が日本に来てから約20年になります。なかには、教育を受けた人、技術者、特別な才能を持つ人もたくさんいます。ビルマの政治状況が相変わらずなので、帰郷の日を待ちながらも、ただ時だけが流れすぎていきます。しかし、平和な日本社会において、ビルマ国籍者難民が厄介事を起こしたことはありません。これらビルマ国籍者難民たちの静かな暮らしぶりを加味して、日本政府が放置してきた難民たちの問題をしっかり考えていただければと思います。

ゴミの中にある黄金は邪魔にならないばかりか、目利きが見て、これを役立てれば、社会のために有用な宝に転じるのです。

ビルマ国籍者難民は難民としての権利を享受することができず、人権を侵害されています。黄金のビルマ出身の難民たちの苦労を理解していただき、お支え下されば、美しい日本の平和な社会の中で、わたしたちは黄金のような価値を持つビルマ国籍者となることでしょう。

難民とは誰か

難民とは、他者によって難民と決定された人ではなく、自分自身が難民であると宣言した人のことです。自分自身がどのような困難に陥っているかは、その本人が良くわかります。困っているときは人にすがり、助けを求めますが、助けてもらえなければ、他に助けてくれる人を探しに行くのは当然です。これが人権です。助けてくれないからといって非難すべきではありません。断られた後に、別の助け手を探して他を当たる、これは難民の人権に基づく行為です。

ビルマ国籍者難民に関しても、ある支援団体や支援者ができる限りのことをしてもなお、十分目標を達成できない場合には、別の団体や支援者へ紹介して繋いでいただけたらと思います。

結論

本日出席いただいた日本の団体の方々、わたしたちビルマ国籍者難民を支援したいという熱意、あるいは真剣な関心をもっていらっしゃった、とわたしは考えています。わたしは、わたしたちが直面している問題をお話しただけであり、非難や文句を述べ立てているわけではありません。今日のワークショップにおいても、それぞれの参加者が経験や抱えている問題などをお話しする予定なので、ぜひとも自由に、活発にご意見を頂きたいと願っています。

翻訳（チンラムルン+熊切拓）